

# 上原 美術館 通信

No.  
**10**

編集・発行 公益財団法人上原美術館  
2020年7月10日発行(季刊年4回発行)  
公益財団法人 上原美術館  
〒413-0715 静岡県下田市宇土金341  
Tel. 0558-28-1228  
[www.uehara-museum.or.jp](http://www.uehara-museum.or.jp)



上原美術館は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、4月8日より5月31日まで休館させていただきました。本展は、当初予定の4月25日のオープンを一か月余り繰り下げ、6月1日から開催しております。今回の展示は、昨年秋に上原美術館に収蔵された平安時代の二天像を初公開するとともに、当館所蔵の古い仏像の全てを展示するものです。

仏教館の展示室、正面奥に立つのが、本展の主演、平安時代の二天像です。二天とは四天王の内、二尊を選んで造像した二体

対の天部像。二天は寺院の中門を守るのが本来の役割ですが、本尊や三尊像の左右にも立ち、仏や寺、仏教を信仰する者を守る護法善神(仏法を守る善の神)です。魔や災厄を降伏するのが役目なので、甲冑を身に付け、当初は振り上げた手には武器を持っていたはずですが、顔を見ると、怒気をはらんだ目鼻口が顔の中心に凝集するさまで、烈しい怒りを表現しています。さらに両足は邪鬼を踏みつけていますが、悪の象徴であり、私たちにとって憎むべき邪鬼は、むしろおとなしく、ユーモラスにさえ見え、二天の強さ、迫力を際立たせています。

ところで同じ天部像であっても、時代によって、強さの表現は大きく異なります。鎌倉時代の毘沙門天や四天王像は、武士の時代にふさわしく、筋肉質ながらもスマートで、スポーツマンのようないかにも颯爽とした姿の像が多いのですが、平安時代の本像は、体はがっしりと太く、重心が下半身にあって、前に立つと、圧倒的な重量感を感じます。敏捷とはいいがたいかもしれませんが、一步も譲らない揺るぎない力を感じさせてくれる、例えるなら屈強な力士やレスラーのような、頼もしい仏像です。

当館所蔵の仏像のうち、久しぶりの展示となるのが中国・宋時代の菩薩像です。像高82.0cm、頭頂から足元の岩座まで一材でつくる像で、肉身は白、頭髪は群青、上半身に纏う天衣と条帛は緑青、裾(巻きスカート)を赤い顔料で着色しています。天衣と条帛を着ける服制と、頭髪を頭上に結い上げた髻、頭上にいただく宝冠などから菩薩像と分かり、本尊の左右に



《二天像》平安時代

立つ脇侍像の片方であったと考えられていますが、尊名判別の決め手となる特徴的な持物や宝冠の標識がないため、何菩薩かまでは知ることができません。体に比して両手と顔がかなり大きめですが、右手で盤に載せた供物を高く捧げ、腰を捻って上に伸びあがるように立つ姿が印象的。丸顔の中央に小さな目鼻をあらわす面貌、とりわけ小さく閉じた口は愛らしく、中国美人を思わせる魅力的な仏像です。

本展では以上の二天像、菩薩像のほか、4ページのコラムでご紹介する十一面観音像と薬師如来像、6ページ掲載の大日如来像、写実的で凛々しい立ち姿の鎌倉時代の阿弥陀如来像など、当館所蔵の仏像を一堂にご覧いただけます。是非ご来館下さい。(田島)



《菩薩像》中国・宋時代

昨年度、上原コレクションにアルブレヒト・デューラー(1471-1528年)の《書斎の聖ヒエロニムス》(図1)が加わりました。この作品は現在、展覧会「上原コレクション名品選3」にてコーナー展示中です。

デューラーはドイツ・ルネサンスを代表する画家、版画家、芸術理論家で、ドイツのニュルンベルク生まれ。最初は金細工師であった父に絵画の手ほどきを受け、1486年から3年間、地元の有力画家ミハエル・ヴォルゲムートの工房に弟子入りします。

持ち前の卓越した細密描写と、イタリア美術から学んだ最新の人体表現などを駆使して国際的な名声を得たほか、自らを真正面から描いた《自画像》(1500年)のような美術史に残る記念碑的作品を描きました。

《書斎の聖ヒエロニムス》は、《騎士と死と悪魔》(1513年)、《メレンコリアI》(1514年)とともにデューラーの「三大銅版画」と呼ばれる作品です。それらのなかでも明快な遠近法空間と深い明暗表現から、その末尾を飾るものと言われています。

僧房のような空間で、書き物をしている聖ヒエロニムスが描かれています。彼は聖書をラテン語へと翻訳したウルガタ訳聖書の翻訳者として、しばしば書齋で書き物をする姿で描かれました。机の上にはインク壺の他に、「十字架上のキリスト」をあらわした小像が置かれ、窓辺のドクロとともに彼の信仰心や精神修養を示しています。

聖人の手前に寝そべるライオンは、聖人のエピソードに由来します。中世の聖人伝説を集めた『黄金伝説』によると、聖ヒエロニムスは、ライオンの足に刺さった棘を抜いて助けた

ことが記されており、しばしば絵画作品には聖人の忠実な友としてライオンが描かれています。本作で描かれたライオンは緻密な平行ハッチングでその毛並みが表現され、この聖人を守護するべく、画面手前の空間に横たわっています。

画面の右上にある大きなヒョウタンは、聖書翻訳にまつわる論争であるという説や、「聖書を曲解する悪しき者」を連想させる図像であるなど、多くの仮説が出されており、結論はまだまだ出ていません。こうした難解な図像をめぐって、デューラーや彼が交流した人文主義者たちの間でも活発な議論がなされたことでしょう。

本作でデューラーがみせる銅版画技術は、最高度に達しています。まず遠近法による空間は、この小さな画面の中かなり奥深い空間を生み出しています。また線を並べたハッチングに加えて、線を交差させるクロスハッチングによって、幅広い明暗と対象の質感を生み出しました。

聖人の発する聖なる光は画中でもっとも明るく輝き、次いで窓から聖人の肩へと当たる光が、頭部を挟んで極端な明暗を生み出しています。窓から部屋へと差し込む光は、輪郭線ではなく、途切れ途切れの線を並べて表現され、ガラスを通した柔らかな効果を巧みに表しています。

「上原コレクション名品選3」では、第3展示室に本作と、デューラー《アダムとエヴァ》(1504年)、そしてそれらの拡大写真を交えて展示しています(図2)。デューラーのビュランの冴えを間近で楽しんでいただけるほか、その圧倒的細密描写を見やすい拡大写真とともに詳しくご紹介します。(齊藤)



図1 アルブレヒト・デューラー《書斎の聖ヒエロニムス》1514年 エングレーヴィング・紙 24.8x19.0cm 上原美術館蔵



図2 展示風景

現代に伝わっている多くの仏像は、過去の人々が様々な祈りをこめて製作し、信仰され、大事に守り伝えてきたからこそ、我々はその姿を目にすることができると言っても過言ではないでしょう。日本の歴史上、数多くの仏像が作られてきましたが、古代において人気を博した仏像として、十一面観世音菩薩像と薬師如来像があげられます。上原コレクション名品選3(2020年9月27日まで)では、当館所蔵の十一面観世音菩薩像(平安時代・10世紀/52.2cm)と薬師如来像(平安時代・12世紀/58.2cm)をご覧いただけます。この二体の仏像は元々どこに安置されていたかは分かりませんが、小振りな像であるため、どちらかという個人的に信仰されてきた仏像ではないかと想像されます。両像とも、対面するものを拒むことのない、慈悲に満ちた表情が印象的です。

十一面観音と薬師如来が信仰を集めた理由として、様々な災いを取り除き、心安らかに暮らせるための功德が説かれていることにあります。特にその功德の中でも病を取り除く仏としての側面が強調されました。薬師如来は薬壺を持っている姿が特徴で、薬師という名前からもわかるように病氣平癒の仏として有名です。一方で、十一面観音の名前が出てくるのは意外に思われるかもしれませんが、四方八方に目を配り、人々を遍く救済する十一面観音にも病を取り除く功德が求められたことは、その經典の内容からも明らかです。そして、時にこの仏たちは、国家規模の災いである疫病の流行に対抗する効験も期待され、その姿を表した多くの仏像が作られてきました。

日本では古来より幾度か、国家規模



《十一面観世音菩薩像》平安時代 重要美術品

で疫病の流行があったことが様々な記録からわかっており、その度に乗り越えてきたという歴史があります。有名な奈良・東大寺の大仏も、奈良時代に流行した天然痘が造像の一因と考えられており、仏教の力で疫病に対処しようとした例としてあげられます。古代においてはウイルスやワクチンという知識はありませんでしたので、目に見えない病は鬼や怨霊が要因として考えられており、その存在を取り除くことが疫病の鎮静化を図る方法でした。そういう目に見えない存在に対処できると考えられていたのが、当時の先端知識であった仏教です。医学が発展した現代からすると、神仏に祈願するという行為は非科学的な話に聞こえるかもしれませんが、何か目に見えない存在がもたらす恐怖という点においては、現代の我々が感じている心境となんら変わりがなかったのではないかと想像されます。今までは、古代の人々の心境は遠い過去の話として、記録から想像することしか出来ません



《薬師如来像》平安時代

でしたが、新型コロナウイルス感染症が世界的な流行を見せている現在においては、そのような心境もリアリティーを持って考えることができるのではないかと考えられます。

様々な祈りを捧げる対象である仏像は、今となっては作られた当初の意味や、目的がわからなくなってしまったものがほとんどです。しかし、そこには祈りや信仰心といった目に見えない思いがあったはずで、そういうものを目に見える形として表現したのが仏像にほかならないのではないのでしょうか。仏像などを目にすると感動を覚えることがあると思いますが、その感動はどこから来ているのか、その背景にあったであろうものにも思いをさせてみて下さい。

梅原龍三郎の絵画といえば、煌びやかな色彩、豪放な筆致というイメージが浮かぶかもしれません。実際に自由奔放な画風は見るものを圧倒しますが、じっくり見ていると、その奥から繊細な光があらわれてきます。

明治21(1888)年、京都に生まれた梅原龍三郎は、15歳で浅井忠の画塾・関西美術院に学び、20歳でフランスへ留学しました。間もなく南フランスに住む憧れのルノワールを訪問します。当時ルノワールは70歳、約束もなしに訪ねてきた日本人の若者を温かく迎え入れ、以後、交流が続きます。

梅原はルノワールの制作を近くで見ることができました。その様子を次のように記しています。「一筆一筆モデルを見て薄い絵具の葉層を布の上に重ねている。私は最も強く豊かな色のアルモニは最も弱い色の最も強いコントラストによつて生まれる事を発見した」(梅原龍三郎『ルノワール先生の追憶』美徳社、1944年)。その制作方法はルノワール晩年に特有の技法です。

歴史的に見ると、油彩画は油絵具の透明性をいかし、重層的に色を塗る手法が一般的でした。しかし、ルノワールら印象派の画家は明るく鮮やかな風景を描き出すため、塗り重ねをやめ、「筆触分割」という技法を生み出します。しかし、ルノワールは次第にその技法に行き詰まりを感じ、晩年には伝統絵画に立ち返ることで、透明性が生む深いトーンと、印象派の鮮やかな色彩を両立させる独自の画風を確立します。色彩の画家マティスはルノワール晩年の作品について、「半分に薄めた絵具と透明塗りを一層うまく使ったのはルノワール」(アンリ・マティス『画家のノート』みすず書房、1978年)と述べています。

若き梅原が目にしたのは、まさにこうした技法でした。梅原はルノワールを通じて油彩画の歴史と技法を体感的に吸収できたと言えるでしょう。

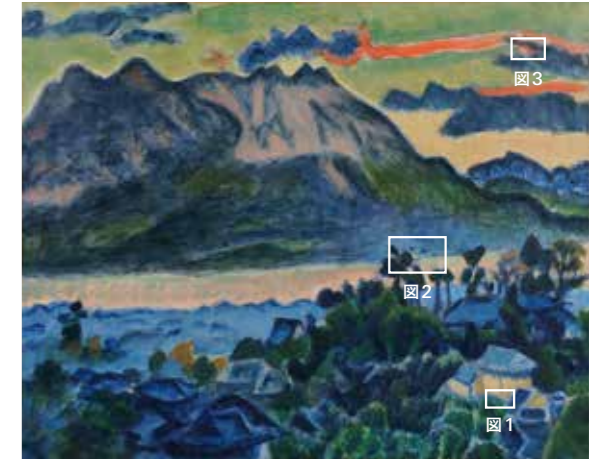
梅原の多くの絵画にはこうした油彩技法に対する鋭い感性が見られます。それがよくあらわれているのが新収蔵となった《朝暉》です。本作には油絵具とともに伝統的な日本画材である岩絵具が併用されています。

画面右下の家の部分を拡大すると、青と緑の粒が見えます(図1)。これらはおそらく岩絵具の「群青」と「緑青」、岩石の藍銅鉱(青)と孔雀石(緑)を砕いた粒子です。岩絵具は重いためカンヴァスの目の凹部に溜まっていることが分かります。

興味深いのは岩絵具の使い方です。岩絵具は通常、不透明な顔料として扱われますが、梅原は油彩のように透明感をもって塗り重ねています。それは画面中央、透明なメディウム[媒材]のしずくに岩絵具が溜まっていることからよく分かります(図2)。一方でしずくの左下では、表現を変えて意図的に緑青を不透明に塗り重ねています。

画面上の空に目を移すと、高層の雲が朝日に赤く輝き、下層の雲はまだ闇を残しています。赤い雲は油絵具の中でも不透明な白やピンクで描かれ、低高度の雲は少し明るい青の上に岩絵具の群青を乗せています(図3)。それらが重層的な効果を生み出して、薄闇の中から輝く朝の光をあらわしています。

自由奔放な梅原の絵画は、色彩の中に透明性や重層性を見出すことで、その輝きがさらに増していきます。



梅原龍三郎《朝暉》1937(昭和12)年 油彩・カンヴァス 64.6×79.5cm



図1



図2



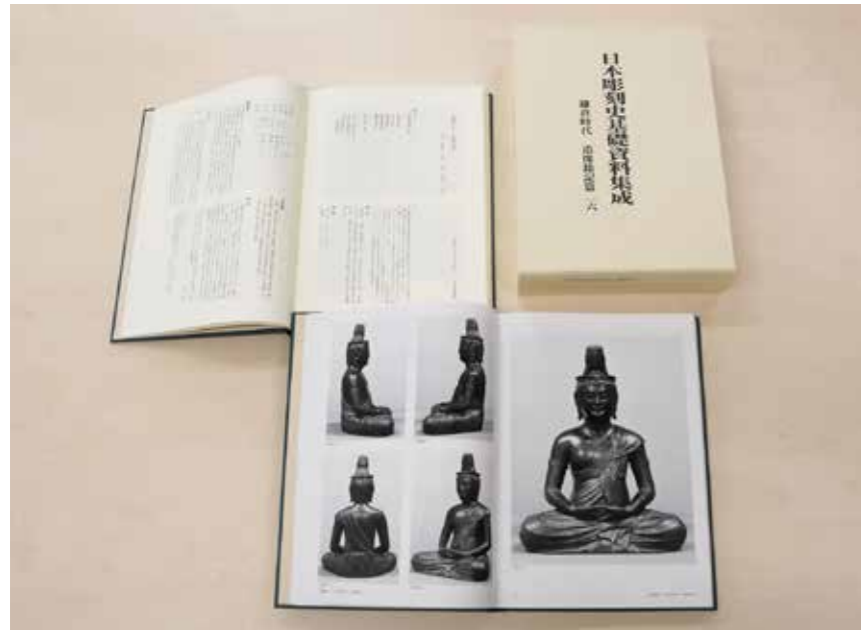
図3

拡大写真撮影：齊藤陽介(カメラ：Nikon D850/レンズ：Nikon AF-S Micro NIKKOR 60mm)

梅原の油彩技法については以下の文献でも詳細に論じられています：小林俊介「梅原龍三郎の絵画技術について—透明画法と不透明画法—」『昭和美術展覧会の研究 戦前篇』中央公論美術出版、2009年

当館が平成29(2017)年7月に収蔵した大日如来像が、『日本彫刻史基礎資料集成』鎌倉時代造像銘記篇一六(2020年2月25日、中央公論美術出版)に掲載されました。本書は鎌倉時代の仏像のうち、仏像に書かれ、あるいは刻まれた銘記によって造像年代が判明する像を網羅して収録する全集で、このような年銘が記されていない圧倒的多数の仏像の年代や作者を検討し、さらに鎌倉彫刻史の諸問題を考える上で、最も重要な基本文献です。本像は像内に記された墨書から、文永7

(1270)年、密教僧と思われる静快の発願により、大仏師行順らが制作したことがわかることから、鎌倉時代の一基準作として収録されました。本書には、当館蔵大日如来像の前後左右からの詳細な写真と、法量や構造などの基礎データが掲載されています。本書は国立国会図書館や、都道府県立図書館などの大きな図書館、あるいは美術史の講座のある大学図書館でご覧いただくことができます。(田島)



### 仏像ギャラリーのパンフレットが新しくなりました

仏教館の仏像ギャラリーでは、近現代に造られた仏像約130体が、お客様をお迎えしています。仏教で説かれる仏菩薩の主要な仏像が一堂に会する空間は、仏教美術を学びたい方や、興味を持たれた方に親しんでいただけたらと思います。

当館はリニューアルオープンから、仏像ギャラリーでご自由にお手にとりいただける仏像の解説パンフレットをご用意し、多くの方にご利用いただきました。この度、解説パンフレットをA4サイズのものから、お持ち帰りしやすいようにA5判に小さくし、見やすい内容にしました。また仏像の前に置いているキャプションもあわせて一新し、文字だけでなく、仏像のシルエットを入れ、どの仏像がなんという名前なのかもすぐに分かるように変更しています。たくさんいる仏たちや、仏の意味を知りたい方はぜひ、解説パンフレットをお手に取ってご覧ください。(櫻井)



### 美術館 周辺 さんぽ①

#### — 伊豆の自然を見つめる少女像



現在の庭の様子。



彫刻の表面をよく見ると、貝殻の化石が所々にあります。



石の模様は少女像に様々な表情を生み出しています。

この不定期シリーズでは美術館周辺の風景や見どころをご案内します。

今回、ご紹介するのは近代館ラウンジの庭に佇む愛らしい少女像、山本正道《風と少女—Versilia》(2000年)です。この彫刻は近代館が建てられた2000年、この風景に合わせて彫刻家の山本正道先生が制作されました。この石材はマルモ・ギブリと呼ばれ、中近東などで採れる石灰岩だそうです。山本先生は毎年、イタリア・トスカナ州のピエトラサンタを訪れています。ピエトラサンタはもともと石材採掘が盛んで、今も世界中から様々な石が集まります。このピエトラサンタで山本先生が出あったのがこの石です。それが縁でこの石は、遠く伊豆・下田までやって来ました。

この少女像は設置当初は美しく磨かれて、もっと明るい色を放っていました。しかし、設置から20年が経ち、季節の移ろいととも次第に伊豆の風景になじんでいます。当時は周囲の木々も隙間が見えていましたが、今では遠くの山と一体化するようにすくすくと育ちました。山本先生は年に2回、この少女像に会いにいらっしゃいますが、この伊豆の自然に溶け込んだ姿をととても気に入ってくださっています。

少女像を近くで見ると、表面には貝殻の化石を発見できます。そこからこの石が太古の昔、海にあったことが分かります。この貝が生きていた時代に想いを馳せてみると、地球の長い歴史がこの彫刻の中に詰まっているようです。そして、いまここに生きる我々の存在が、太古の地球から繋がっていることを感じさせます。ラウンジの大きな窓から庭に出ることもできますので、ぜひお近くでご覧いただければと思います。

彫刻が設置されてちょうど20年、少女像は成人式を迎えました。伊豆の季節の移ろいととも、美術館はこれからもこの少女とともに、ゆっくりと歩み続けていければと思っています。(土森)

#### 上原美術館の近況

伊豆半島では4月7日に松崎町で初めての新型コロナウイルスの感染者が発生、そのことを受けて当館は開催中の展覧会を5日間休止し、4月8日より臨時休館の対策を取りました。その後、西伊豆町や南伊豆町でも感染が確認され、4月22日には下田市でも感染者が1名発生しました。例年、渋滞が発生する伊豆のゴールデンウィークは静まり返り、美しい新緑だけが輝いていました。これほど静かな連休の下田は過去数十年ではなかったことと思います。その後、伊豆半島では新たな感染者は発生せず、静岡県から発令されていた緊急事態宣言は5月14日に解除されました。しかし、下田市で開催予定となっておりました「黒船祭」(5月15日～17日)や「あじさい祭り」(6月1日～6月30日)、「太鼓祭り」(8月14日、15日)などのイベントが中止となっており、観光への影響が心配されます。

世界中の美術館・博物館もその影響を受けています。当館から貸出予定となっていた3件の展覧会も中止となりました。いずれの展覧会も長い期間を経て準備された回顧展

ばかりで残念ですが、ご担当の皆様は来年度以降の開催を目指して奮闘しておられます。ポーラ美術館『モネとマティス もうひとつの楽園』展(～11月3日)は、海外からの出品が叶いませんでしたが、国内の素晴らしい約70点を迎えて6月1日より開催されています(当館からはモネとマティス各1点を出品)。

上原美術館では臨時休館の間、職員はリモートワークなどを取り入れながら、展覧会準備や調査研究を続けておりました。このような状況の中で美術品や仏像と向き合うと、いかにこれまでの日常がかけがえのないものであったかを改めて感じます。

美術館は6月1日に再開しました。開館時間や受付場所を変更し、またラウンジの机を一時的に減らすなど、お客様にはご不便をおかけいたしますが、ぜひ絵画や仏像と対面して、心静かなひとときをお過ごしいただければと思っています。



夏の伊豆といえば海のイメージがあるかと思いますが、山に囲まれた伊豆では、青空とのコントラストが清々しい、新緑の風景も魅力の一つです。美術館の周辺には箱庭のような田園風景が広がっていますが、この時期になると田圃には水がはられ、田植えが行われます。風に揺られる緑の稲穂は初夏の訪れを告げる風物詩です。その稲穂もやがては黄金色に実り、季節の移り変わりを感じさせてくれる、そんなお勧めの景色です。

(菅野)

## ● 開館のお知らせとお客様へのお願い ●

緊急事態宣言を受け、4月8日より臨時休館しておりましたが、新型コロナウイルス感染症拡大防止対策が整い、また静岡県の緊急事態宣言が解除されたことから、6月1日より開館いたしました。

再開におきましては、ご来館される皆様に以下の感染防止対策にご協力いただきたく、ご理解ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

### 〈ご来館されるお客様へ〉

#### — 受付場所・開館時間の変更について(暫定措置)

- ・受付場所を「仏教館」から「近代館」に変更いたします。
- ・開館時間は9:30～16:30(最終入館16:00)に変更いたします(消毒・清掃のため)。

#### — ご入館時のお願い

- ・マスク着用をお願いいたします。
- ・アルコール消毒液のご用意がございますので、手指消毒をお願いいたします。
- ・「検温」及び「体調確認書」記入にご協力をお願いいたします。

\*体調不良の方には、入館をご遠慮いただく場合がございますのでご了承ください。

- ・「3密」を避けるため、やむを得ず入館制限する場合がございます。

#### — 館内対応について

- ・ギャラリートーク(毎月第3土曜日)は当面の間、休止いたします。
- ・ラウンジでの飲料サービスは当面の間、休止いたします。

#### — 当館での取組について

- ・常に情報収集に努め、感染の予防、防止に細心の注意を払います。
- ・スタッフは毎日検温し、マスク着用にて応接いたします。
- ・感染症拡大防止対策として、受付への飛沫防止アクリル板を設置し、手指消毒液の設置、マスク準備、定期館内清掃を強化いたします。

最新の情報は上原美術館ホームページやtwitter、facebookで発信しておりますので、ご来館の際は事前にご確認いただけますと幸いです。新型コロナウイルス感染症の感染予防・拡散防止のため、ご理解・ご協力の程、何卒よろしくお願い申し上げます。

次回休館日は2020年9月28日(月)～10月9日(金)です(展示替えのため)